

「こおりやまの米」通信



GOOD RICE DAY
毎月8日は
こおりやま「お米の日」



令和5年7月

編集:郡山市

JA福島さくら郡山統括センター (Tel. 024-921-0503)

NOSAI福島中央支所 (Tel. 024-933-3307)

県中農林事務所農業振興普及部 (Tel. 024-935-1310)

発行:郡山市農作物生産対策協議会

(郡山市園芸畜産振興課 Tel.024-924-3761)

Vol.5 肥培管理・病害虫対策



こおりやまの米通信

検索

*最新および過去の記事は、郡山市ホームページから見ることができます。

1 品種毎の生育ステージの目安

【管内主要品種の平年の生育ステージ】(JA福島さくら郡山統括センター栽培暦)

今年の生育状況は郡山市ホームページに掲載されています。閲覧できない方は、市・JAにお問い合わせください。

平年の各生育ステージの目安を右表に示しました。天候等により変動するので、ほ場をよく観察し、適期の水管理及び防除を行ってください。

品種	幼穂形成始期	出穂期	乳熟期	穂いもち防除時期
ひとめぼれ	7月11日頃	8月5日頃	8月12～15日頃	7月21～26日頃
里山のつぶ(湖南)	7月16日頃	8月10日頃	8月17～20日頃	7月26～31日頃
天のつぶ	7月上～中旬	8月上～中旬	8月中～下旬	7月下旬～8月上旬
コシヒカリ	7月17日頃	8月11日頃	8月18～21日頃	7月27日～8月1日頃

※幼穂形成始期:主茎の80%以上の幼穂が1mmに達した日

※出穂期:全穂の約半分が出穂した日

※乳熟期:出穂期の7日～10日後、籾を指で押しつぶすと乳液状の汁が出る時期

※穂いもちの防除時期は粒剤での防除適期

・時期別の水管理のポイント ～出穂前は低温、出穂後は高温に注意～

中干し後、落水までは間断かんがいを基本とし、出穂期は湛水して管理してください。

【幼穂形成期から出穂前まで】

17℃以下の低温時には障害不稔を予防するため、幼穂形成期(出穂の25～20日前)では幼穂の高さまで、減数分裂期(出穂の15～7日前)ではできる限りの深水管理とし、幼穂を保護してください。

【出穂後】

出穂後の高温時には、品質低下対策として、田面が露出しない程度のひたひた水(飽水)管理または昼間深水・夜間落水に努めてください。台風等での強風が予想される場合は、穂や葉枯れを防ぐため十分に湛水してください。



2 病害対策 ～ほ場をよく観察し、過去に病害が発生したほ場では早めに防除を～

- (1) 葉いもちは、早期発見・早期防除につとめ、病斑を発見したら液剤や粉剤で防除してください。
- (2) 穂いもち予防は、コラトップ粒剤5(3～4kg/10a:出穂15～10日前まで)等を散布してください。特に幼穂形成期が低温で経過した場合は、穂いもちが発生しやすくなるため注意してください。
- (3) 紋枯病の発生が多い水田では、上位葉まで進展する前にモンガリット粒剤(3～4kg/10a:出穂28～14日前(収穫45日前)まで)等を散布してください。
- (4) 稲こうじ病は出穂期に雨が多い年に多発します。出穂期の多雨が予想される場合は、前年に発生が多かった水田にZボルドー粉剤DL(3～4kg/10a:出穂20～10日前まで)等を散布してください。散布適期が限られるので天気予報等を参考に遅れないように防除してください。

～いもち病適期防除にBLASTAM(ブラスタム)活用を～

福島県病害虫防除所のホームページでは、葉いもちに感染しやすい日を判定するシステム、BLASTAM(ブラスタム)の判定結果を公開しています。感染しやすい日の1週間後にほ場を注意して観察することにより、予察を効率的に行うことができます。

ブラスタムQRコード →



3 追肥（穂肥）

～出穂25日前の生育状況で判断してください～

出穂25日前に生育を確認し、草丈が長く葉色の濃い場合は、穂肥の量を減らすか時期を少し遅らせませす。また、出穂5日前以降の実肥は、玄米タンパク質が増加し食味が低下するので行わないようにしてください。

出穂は天候により前後しますので、最も長い茎を根元から引き抜き、カッターナイフ等で縦に半分に割り、幼穂長が1mmとなった日が出穂25日前の目安です。ばらつきがあるので、数本の平均で判断してください。

基肥一発肥料を使用した場合は、原則として追肥は行いません。追肥の適期は品種毎に異なり、その年の生育状況により前後しますので、「こおりやまの米」通信Vol.4号を参考に判断してください。

出穂25日前の生育の目安

品種	草丈	葉色 (カラースケール)
コシヒカリ	65～70cm	3.0
ひとめぼれ	60～65cm	3.5～4.0
あきたこまち	55～60cm	3.5～4.0
天のつぶ	65～70cm	3.5～4.0
里山のつぶ	65～70cm	3.5～4.0
ふくひびき	65～70cm	4.0～4.5

～飼料用米は多収を目標に！～

飼料用米の交付金は、区分管理方式の場合、出荷量に応じて交付金額が増減します。また、飼料用米では食味は評価されないため、倒伏しない程度に穂肥量の上乗せや、実肥等を検討してください。

なお、「ふくひびき」では、幼穂形成始期の葉色がSPAD502値で40以上(カラースケールで4程度)を確保することが推奨され、穂ぞろい期までに急激な葉色の低下や葉の枯れ上がり等の栄養凋落が見られる場合は、幼穂形成始期以外にも適宜追肥する必要があります。

多量の追肥はいもち病の感染のおそれが高まるため、追肥に併せた防除も検討してください。

農薬危害防止運動実施中！

6月10日～9月10日

農薬は施錠して保管し、使用前に、もう一度ラベルを確認してください。周辺住民に配慮した農薬の使用をしてください。



4 出穂後の斑点米カメムシ類対策

～全量一等を目指して適期防除を！～

- (1) 1回目の防除: 粉剤、液剤等による防除は、乳熟期を基本とします。散布は畦畔にも十分に薬剤がかかるように行ってください。また、粒剤を使用する場合は、穂揃期～乳熟期に湛水状態で散布し、7日以上止水します。
- (2) 追加防除: 1回目の防除後も水田内でカメムシが見られる場合は、7日おきに追加防除を行ってください。特に、割れ籾の多い天のつぶや里山のつぶ等は可能な限り実施してください。
- (3) 出穂10日前以降の草刈りは、カメムシを水田内に追い込むので避けてください。この期間に草刈りを実施する場合、殺虫剤の散布後に行ってください。
- (4) 殺虫剤による蜜蜂等への被害を未然に防ぐため、ほ場近隣に蜜蜂の巣箱がある場合は、飛散の少ない粒剤をお勧めします。防除は、蜜蜂の活動の盛んな時間を避け早朝、または夕方とし、散布時には風向風速に注意しましょう。なお、事前に養蜂業者へ防除の予定を伝えるようにしてください。

主な斑点米カメムシ類の防除剤

薬剤名	使用量	使用回数	使用時期
スミチオン 粉剤3DL	3～4kg/10a	2回以内	収穫21日前まで
スタークル粒剤	3kg/10a	3回以内	収穫7日前まで
キラップ フロアブル	1000～2000倍、 140～150L/10a	2回以内	収穫14日前まで



刈払い機の使用前には、刈刃のヒビや固定を確認してください！

熱中症にご注意！！

温暖化に伴い近年、農作業中の熱中症による事故が増加しています。

めまいや、筋肉の痙攣、こむら返りは熱中症の初期症状です。作業を中断して日陰等で体を冷却すると共に、水分を補給してください。

予防のため、作業中はこまめに休憩を取り、水分や塩分を補給してください。

